

『楞嚴經』卷六 訳注 (二)

教学研究委員会編

(小川太龍・野口善敬・廣田宗玄・堀 祥岳・本多道隆・丸毛俊宏〔五十音順〕)

本稿は、『大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行首楞嚴經』(略称『楞嚴經』)卷六に対する訳注の試みの第二回目である。前稿同様、底本には、磧沙藏本(新文豊出版公司影印『宋版磧沙大藏經』)を使用し、校本には、高麗藏本に拠る『大正大藏經』第一九冊所収本を用いた。凡例については、前稿に掲載済みであるので省略する。

〔三〕

世尊、我復以此聞熏聞修、金剛三昧、無作妙力、與諸十方三世六道一切衆生、同悲仰故、令諸衆生、於我身心、獲十四種無畏功德。一者、由我不自觀音、以觀觀者、令彼十方苦惱衆生、觀其音聲、即得解脫。二者、知見旋復、令諸衆生、設入大火、火不能燒。三者、觀聽旋復、令諸衆生、大水所漂、水不能溺。四者、斷滅妄想、心無殺害、令諸衆生、入諸鬼國、鬼不能害。五者、熏聞成聞、六根銷復、同於聲聽、能令衆生、臨當被害、刀段段壞、使其兵戈、猶如割水、亦如吹光、性無搖動。六者、聞熏精明、明徧法界、則諸幽暗性不能全、能令衆生、藥叉羅刹、鳩槃荼鬼、及毗舍遮、富單那等、雖近其傍、目不能視。七者、音性圓銷、觀

聽返入、離諸塵妄、能令衆生、禁繫枷鎖、所不能著⁽²²⁾。八者、滅音圓聞、徧生慈力、能令衆生、經過險路、賊不能劫⁽²³⁾。九者、熏聞離塵、色所不劫、能令一切多姪衆生、遠離貪欲⁽²⁵⁾。十者、純音無塵、根境圓融、無對所對⁽²⁶⁾、能令一切忿恨衆生、離諸嗔恚⁽²⁷⁾。十一者、銷塵旋明、法界身心、猶如瑠璃、朗徹無礙、能令一切昏鈍性障諸阿顛迦⁽²⁸⁾、永離癡暗⁽²⁹⁾。十二者、融形復聞、不動道場、涉入世間、不壞世界、能徧十方、供養微塵諸佛如來、各各佛邊、爲法王子⁽³¹⁾、能令法界無子衆生、欲求男者、誕生福德智慧之男⁽³²⁾。十三者、六根圓通、明照無二、含十方界、立大圓鏡、空如來藏、承順十方微塵如來、祕密法門、受領無失、能令法界無子衆生、欲求女者、誕生端正福德柔順、衆人愛敬、有相之女⁽³⁶⁾。十四者、此三千大千世界、百億日月、現住世間、諸法王子、有六十二恒河沙數⁽³⁸⁾、修法垂範、教化衆生、隨順衆生、方便智慧、各各不同。由我所得、圓通本根、發妙耳門、然後身心、微妙含容、周徧法界⁽⁴¹⁾、能令衆生、持我名號、與彼共持六十二恒河沙諸法王子⁽³⁹⁾、一人福德、正等無異。世尊、我一名號⁽⁴⁰⁾、與彼衆多名號無異、由我修習、得真圓通⁽⁴²⁾。是名十四施無畏力、福備衆生。

【校記】(一)熏ニ大正藏は「薰」に作る。(二)蜜ニ大正藏は「密」に作る。(三)周徧ニ大正藏は「遍周」に作る。(四)名號ニ大正藏は「號名」に作る。

*

世尊よ、我れ復た此の聞熏聞修、金剛三昧、無作の妙力を以て、諸もろの十方三世の六道の一切の衆生と、同とに悲仰するが故に、諸もろの衆生をして、我が身心に於いて、十四種の無畏功德を獲えさしむ。一には、我れ自ら音を觀ぜず、以て觀する者を觀するに由り、彼の十方の苦惱せる衆生をして、其の音聲を觀みずれば、即ち解脱を得さしむ。二には、知見旋復すれば、諸もろの衆生をして、設たとい大火に入るとも、火も燒くこと能わざらしむ。三には、聽を觀じて旋復すれば、諸もろの衆生をして、大水に漂わさるるも、水も溺

れしむること能わざらしむ。四には、妄想を斷滅し、心に殺害無ければ、諸もろの衆生をして、諸もろの鬼國に入るも、鬼、害すること能わざらしむ。五には、聞を熏じて聞を成じ、六根銷復して聲聽に同じなれば、能く衆生をして、當に害せらるべきに臨むも、刀、段段に壞らしめ、其の兵戈をして、猶お水を割くが如く、亦た光を吹くが如くならしめ、性は揺動すること無からしむ。六には、聞熏精明にして、明、法界に徧あまければ、則ち諸もろの幽暗の性は全きこと能わず、能く衆生をして、藥叉・羅刹、鳩槃荼鬼、及び毗舍遮、富單那等、其の傍に近づくと雖も、目は視ること能わざらしむ。七には、音性圓銷し、聽を觀じて返入して、諸もろの塵妄を離るれば、能く衆生をして、禁繫の枷鎖、著くこと能わざる所ならしむ。八には、音を滅し聞を圓とまにして、徧あまく慈力を生ずれば、能く衆生をして、險しき路を經過するも、賊、劫おぼかすこと能わざらしむ。九には、聞を熏じて塵を離れ、色、劫おぼかさざる所なれば、能く一切多姪の衆生をして、貪欲を遠離せしむ。十には、純音に塵無く、根境圓融して、對と所對と無ければ、能く一切忿恨の衆生をして、諸もろの嗔恚を離れしむ。十一には、塵を銷けして明に旋めぐり、法界と身心は、猶お瑠璃の如く、朗徹無礙なれば、能く一切昏鈍の性障の諸もろの阿顛あてん迦かをして、永く癡暗を離れしむ。十二には、形を融して聞に復し、道場を動かずして、世間に涉入し、世界を壞さずして、能く十方に徧あまく、微塵の諸佛如來を供養して、各各の佛邊にて、法王子と爲れば、能く法界の子無き衆生の、男おとこを求めんと欲する者をして、福德智慧の男おとこを誕生せしむ。十三には、六根圓通し、明らかに照らすこと無二なりて、十方界を含み、大圓鏡、空如來藏を立て、十方微塵の如來に承順し、祕蜜の法門、受領して失うこと無ければ、能く法界の子無き衆生の、女めを求めんと欲する者をして、端正福德柔順にして、衆人に愛敬せらるる、有相の女めを誕生せしむ。十四には、此の三千大千世界、百億の日月あり、世間に現れ住とどまる、諸もろの法王子は、六十二恒河沙數有り、法を修し範を垂れて、衆生を教化するも、衆生に隨順する、方便と智慧は、各各同じからず。我が得る所の、圓通の本根

は、妙なる耳門より發し、然る後に身心、微妙に含容し、法界に周徧するに由り、能く衆生をして、我が名號を持つものと、彼の共に六十二恒河沙の諸もろの法王子を持つものと、二人の福德、正に等しくして異なること無からしむ。世尊よ、我が一名號と、彼の衆多の名號とは異なること無きは、我れ修習して、眞の圓通を得るに由りてなり。是れを「十四の施無畏力」と名づけ、福を衆生に備わしめん。

*

世に尊きお方よ、私は、さらにこの聞熏聞修（聞・思・修の実踐）と（聞・思・修の実踐で得られた）金剛三昧（堅固な禪定）と（金剛三昧を得たことで臨機応変に衆生を救済できる）無作の妙なる力でもって、諸々の十方三世にわたる六道の（うちに存在する）一切の衆生と共に（衆生の苦しみを）悲しみ（衆生の安樂を）仰ぎ求めておりますので、諸々の衆生に、私の（この）身心において（以下の）十四種の無畏功德（災難や畏れがない状態にする功德）を手に入れさせます。「まず」一つには、私は、「聴覚の対象となる」音を自ら観じるのではなく、「その音を」観じる（聞性（耳聞という根性）なる）ものを観じ（ること）で、一切の煩惱から解き放たれ」ておりますので、かの十方で苦惱する衆生に、私の（名号を称えるその）音声（おと）を観じて即座に（如何なる苦惱からも）解脱させるように致します。二つには、「私は、認識したり見たりといった）知や見（のはたらき）が（円満な本性に）立ちかえっておりますので、諸々の衆生が、たとえ大火（のなか）に入ろうとも、「そうした）火でさえ（彼らを）焼くことができないうようにさせます。三つには、「（私は）聴くということを観じて（本性に）立ちかえっておりますので、諸々の衆生が、（たとえ）大水に流されようとも、「（そうした）水でさえ（彼らを）溺れさせることができないうようにさせます。四つには、「（私は、誤った想念である）妄想を断ち切っており、「妄想の生滅によつて）心に（法身を）殺し（慧命を）害するようないことがありませんので、諸々の衆生が、（たとえ）諸々の（悪）鬼（の住まう）国に入ろうとも、

〔そうした悪〕鬼が〔彼らに〕危害を加えることができないようにさせます。五つには、〔私は、耳識・耳根・声境に由来する虚妄な〕聞を〔正しく〕習慣づけ〔て対治し〕、〔真正の〕聞〔への立ちかえり〕を成就しており、〔眼・耳・鼻・舌・身・意の〕六根は、〔このうちの耳と、それに関わる〕声と聴〔とが本性に立ちかえっているの〕と同じく、〔根・境〔＝塵〕・識を〕消滅して〔本性に〕立ちかえっておりますので、衆生が危害を加えられんとする事態に直面しても、〔彼らに振り下ろされる〕刀を木っ端微塵に折り砕き、そうした武器を、ちょうど水を分割しようとしたり光を吹きとばそうとしたりといったような〔無意味で役に立たない〕ものにさせ、〔人為的なはからいを加えない本〕性は、びくとも動かないようにさせます。六つには、〔私は〕聞熏〔習の実践〕が明るく清らかで、〔智慧の〕光明が法界に普く行きわたっておりますので、〔無明の〕暗闇など生じようがなく、衆生に〔対し〕、葉叉・羅刹・鳩槃荼鬼や毘舍遮・富单那らがそばに近づくとも、〔これら悪鬼たちの〕目では〔衆生の存在を〕見えないようにさせられます。七つには、〔私は、執着の対象となる〕音性〔音を音たらしめているもの〕が円満に消え、聴くということを観じて〔本性に〕立ちかえり、諸々の塵妄〔虚妄な心によって生じる色・声・香・味・触・法の六塵〕を除き去っておりますので、衆生に〔対し〕、〔彼らを〕拘束する枷・鎖〔のような六塵の纏わりや六根による碍げ〕が〔彼らの身心に〕付けないようにさせられます。八つには、〔心を劫かし善を害う虚妄な〕音を滅し、聞を円〔満なもの〕にして、普く慈〔悲の〕力を起こしますので、衆生に〔対し〕、〔彼らが〕険しい路を通り過ぎようとも、盗賊に〔彼らを〕劫かさないようにさせられます。九つには、〔私は、耳識・耳根・声境に由来する虚妄な〕聞を〔正しく〕習慣づけ〔て対治し〕、〔虚妄な〕塵を除き去って、色〔欲〕に劫かされるようなことがありませんので、淫欲に耽る一切の衆生に〔対し〕、〔自己の欲するものを貪り求める〕貪欲を除き去らせることができます。十には、純〔浄な〕音には〔心をけがす〕塵〔垢〕がなく、〔感觉器官とその対象である〕根

と境は円〔満に相即〕融〔合〕して、対立する〔主体となる〕もの〔根〕と、対立される〔客体となる〕もの〔境〕とが〔存在すること〕ありませんので、怒りや恨みに狂う一切の衆生に〔対し〕、「そうした」諸々の瞋恚（怒りや恨み）を除き去らせることができます。十一には、「私は、心をけがす」塵（ちり）〔によって生じる迷いの暗闇〕を消して明〔らかな真理〕に立ちかえり、法界（せかい）と〔この〕身心（しんしん）が、ちょうど瑠璃（るり）のように、すっきりと置いて得げ（たま）あうことがありませんので、「真理に」昏（くら）〔くて愚〕鈍（どん）な自性の障り（さわ）をもった阿顛迦（あてんか）（悟り得ないとされる者）に、永久に迷いの暗闇から遠ざけさせることができます。十二には、形〔をもつ全てのもの〕を融合し〔一体となつ〕て〔真正の〕聞（き）に立ちかえり、道場でじつとしたままで、世間に分け入り、世界を壊さずに、十方（あらかゆるこみ）に普く行きわたつて、微塵（みじん）の諸もろの仏如来（ほとけ）を供養し、それぞれの仏のそばで法王子（ほふさつ）となることができますので、「この」法界（せかい）で子どもを持たない衆生のうち、男の子を欲しがる者には、福德（ふく徳）善行（ぜんぎょう）によって得られる福利・功德（ふくい・く徳）と智慧（ちゑ）を具えた男の子を誕生させることができます。十三には、「私は」六根（ろくこん）が〔得げあうことなく〕円〔満に融〕通（つう）しており、対立も差別もなく明らかに照（あ）らしたし、十方界（あらかゆる世界）を包み込んで、大円鏡〔智〕（ありとあらゆる存在を照らしたず智慧）と空如来藏（くうにょらいざう）（無量の功德を含蔵する本心）を〔確〕立（た）しています。〔さらに〕十方（あらかゆるこみ）の微塵（みじん）の如来（ほとけ）に付き従い、「奥深い」秘密（ひみつ）の法門（ほふもん）を受けて失うことがありませんので、「この」法界（せかい）で子どもを持たない衆生のうち、女の子を欲しがる者には、容姿端麗（ようさたんれい）、福德（ふく徳）を具えて柔順（じゆん）で、「かつ」多くの人々に愛し敬（うやまつ）われる有相（うがた）をもった女の子を誕生させることができます。十四には、この三千大千世界（さんせんぢゆうせんせかい）と〔それぞれの世界に〕百億日月（ひやくおくにちげつ）があつて、「そうした」世間に現れ住（すま）まる六十二恒河沙（むそにじふにじゆうがさ）数の法王子（ほふさつ）は、仏法を修めて模範（もはん）を示し、衆生を教化（けわくわ）しておりますが、衆生〔の素質や能力〕に應（お）じる、「その」方便（ぼんぽう）と智慧はそれぞれに異なっています。私が〔聞思修の実践を通して修め〕得た円〔満に融〕通（つう）した本根（ほんこん）は、妙（たえ）なる耳〔とてい〕門（もん）から啓発（けいぱつ）し、その後（のち）に、「この」身心（しんしん）は、微妙（みせう）に〔この法界を〕包み込み、

法界せかいに普く行きわたりますので、衆生で、私の名号なごうを持つ者と、彼の六十二恒河沙むそくにしやの諸々の法王子ほふし（の名号）を同じように持つ者と、「この」二人（「が得るところ」の福德が、まさに等しく同じであるようにさせる）ことができます。世に尊きお方よ、私の「観世音菩薩」という）名号（「によってもたらされる功德」と、彼の多くの「法王子たちの」名号（「によってもたらされる功德」とが異ならないのは、私が「聞思修を實踐し、これを」修めて本当の円「満融」通（なる無碍のはたらき）を得たからです。これを「十四の施無畏力（畏れを取り去る力）」と名づけ、「これによって」福（徳）を衆生に具備させましょう。

*

(1) 聞熏聞修 〔二〕注(1) 参照。

(2) 金剛三昧 〔二〕注(1) 参照。

(3) 無作妙力 〔二〕注(1) 参照。

(4) 悲仰 〔二〕注(11) 参照。

(5) 於我身心 、『観音義疏記』に「一切の依・正、皆な是れ観音の妙身・妙心なり（一切依正、皆是観音妙身妙心）」（巻四・T3:956c）とあり、一切の正報（過去の業むすびによって受けた身心）と依報（その身心の依りどころとなる世間・環境）は、全て観世音菩薩の妙なる身であり、妙なる心であるとされる。

(6) 令諸衆生：獲十四種無畏功德 、『通議』は、「悲しみ苦しんだり、安樂を仰ぎ求めたりという」衆生の悲仰は、菩薩の悲仰にほかならないのである。だから、菩薩の「廣大無辺の」身心の中で、諸々の衆生に「災難や畏れがない状態にする」十四種の無畏功德を手に入れさせる（衆生の悲仰は、即ち菩薩の悲仰なり。故に菩薩の身心の中に於いて、諸もろの衆生をして十四種の無畏功德を獲さしむ／衆生之悲仰、即菩薩之悲仰也。故於菩薩身心之中、令諸衆生獲十四種無畏功德）（巻六・Z19:105c）とする。「無畏」とは「恐怖しないこと。安穩で怖畏の全くない状態」（『中村』p1312）

のこと。以下では、「一者」「二者」という表現を用いて、衆生に災難や畏れをなくさせる観世音菩薩の十四種の功徳が順次述べられる。これら十四種の功徳は、『法華経』「普門品」(19:56c-58b、岩波文庫本① p.242-271)で説かれるものと内容の面で同じである。ただし、『法華経』では、観世音菩薩の功徳が、積尊によって無尽意菩薩に説かれるのに対し、『楞嚴経』では、衆生済度のための積極的態度を示す観世音菩薩自身が、それらを積尊に披瀝するという違いがある。

(7) 我不自観音、以観観者 、『義疏注経』は、「私は、「耳で」聴く音声(「という聴覚の対象」を観しているのではなく、ただ聞性(耳聞という根性)を観じるだけである(我れ聴く所の音声を観せず、但だ聞性を観ずるのみ/我不観所聴音声、但観聞性)」(卷六・139:96c)とし、『要解』は、「自ら音を観せず」とは、「聴覚の対象となつて心をけがす」聞塵が引き起こす知や見(「といった見聞覚知」に引きずられないということである。『以て観する者を観ず』とは、「聴覚の対象へと向かう)聞機(聞くというはたらき)を反転して自性を照らし返すということである(「自ら音を観せず」とは、聞塵、起こす所の知見に随わざるなり。『以て観する者を観ず』とは、聞機を旋倒して自性を返照するを謂うなり/不自観音者、不随聞塵所起知見也。以観観者、謂旋倒聞機返照自性也)」(卷一・217:38a)とする。「観者」は、『義疏注経』の解釈に従つて、「聞性」と解した。

(8) 由我不自観音：即得解脱 、『義疏注経』は、「私は、「耳で」聴く音声(「という聴覚の対象」を観じるのではなく、ただ聞性(耳聞という根性)を観じるだけであるから、音声は自ずと寂靜であつて、聞(「くという)相は生滅を離れ、「認識の)塵境は「執われの対象として」関わつてくることはなく、自然と解脱すること、自ずと既にかくの如くである。だから、十方の一切の衆生に、私の「名号を称えるその)」音声を聞いて即座にその苦惱から免れさせるのである(我れ聴く所の音声を観せず、但だ聞性を観ずるのみなるに由り、音声自ら寂なりて、聞相は無生、塵境拘わらず、自然に解脱すること、自ら既に是くの如し。故に十方の一切の衆生をして、我が音声を聞けば、即ち苦より

度^{たく}るるを得さしむ／由我不觀所聽音声、但觀聞性、音声自寂、聞相無生、塵境不拘、自然解脫、自既如是。故令十方一切衆生、聞我音声即得度苦」(卷六・T39:90c)とし、『通議』は、「〔觀世音〕菩薩は、〔聽覺の対象となる〕音を自ら^{みずか}観じるのではなく、ただ聞性(耳聞という根性)を觀じて根・塵(感覺器官とその対象)〔という關係性〕をすぐさま解消しているから、苦惱する衆生に、〔彼らが〕自ら〔觀音〕菩薩(の名号)を称^{とな}える音を觀^{おと}じれば、即座にその苦惱から免れさせるのである(菩薩は自ら音を觀せず、但だ聞性を觀じて根・塵頓^{とん}に脱するのみなるに由るが故に、苦惱せる衆生をして、自ら菩薩を称^{とな}うるの音を觀すれば、即ち其の苦より脱せしむるなり)由菩薩不自觀音、但觀聞性根塵頓脫故、令苦惱衆生、觀自称菩薩之音声、即脫其苦也」(卷六・Z19:10c)とする。また、『法華經』「普門品」には「若し無量百千万億の衆生有りて、諸もろの苦惱を受けんに、是の觀世音菩薩を聞きて、一心に名を称^{とな}うれば、觀世音菩薩は、即時^{ただち}に其の音を觀じて、皆な解脫^{まな}るることを得せしめん(若有無量百千万億衆生、受諸苦惱、聞是觀世音菩薩、一心称名、觀世音菩薩、即時觀其音声、皆得解脫)」(T0:56c、岩波文庫本④ p.232)とある。

(9) 知見旋復 Ⅱ 「旋復」は「回轉。回還(返る。ぐるりと向きが変わる)」(『漢語』第六冊・p.1611、縮印本④ p.4064)こと。こは、「〔本性に〕立ちかえる」の意味。『義疏注經』は、「もともと(人の身体を構成する地・水・火・風の)四大はそれぞれ(静まりかえって)ゆったりとしたものだから、〔本性に〕立ちかえって、〔見聞〕覺知を本来の聞〔のありよう〕に戻せば、知や見〔といったはたらき〕は(静まりかえって)ゆったりとした状態に立ち帰る(本と四大分湛なるに由り、旋^まりて覺知をして今ま本間に復さしめば、知見は湛に歸す／本由四大分湛、旋令覺知今復本間、知見歸湛)」(卷六・T39:90c)とする。

(10) 令諸衆生…火不能燒 Ⅱ 『義疏注經』は、「静まりかえって」ゆったりとした本性が円満に行きわたってれば、「執着の対象となつて煩惱を引き起こす」塵は捉えようがない。塵である火が尽きてしまつていけば、如何なるものも焼くことはできない。だから、衆生に大火で損なわれないようにさせるのだ(湛性は円遍すれば、塵得^{ちやう}

可きこと無し。塵火既に歇とどまれば、何物か能く焼かん。故に衆生をして大火に壞されざらしむ／湛性円遍、無塵可得。塵火既歇、何物能焼。故令衆生大火不壞」(卷六・T39:905c)とし、「火」を「塵」(執着の対象となって煩惱を引き起こす外的要因)のこととして解釈している。また、『法華経』「普門品」には「若し是の觀世音菩薩の名を持つ者有らば、設たい大火に入るとも、火も焼くこと能わず。是の菩薩の威神力に由るが故に(若有持是觀世音菩薩名者、設入大火、火不能燒。由是菩薩威神力故)」(T9:56c、岩波文庫本① p.212)とある。

(11) 觀聽旋復：水不能溺〓懷遠『首楞嚴經義疏要鈔』は、「聽を觀じて旋復す」とは、聽根(聞根)を觀じ、「執着の対象となって煩惱を引き起こす」塵を無くして真(実のありよう)に復歸する(ということな)のである(「聽を觀じて旋復す」とは、聽根を觀じ、塵を亡くして真に復するなり／觀聽旋復者、觀於聽根、亡塵復真也)」(卷五・T16:286d)とする。『義疏注経』は、「水」を「音声」のことと捉え、「音」声が〔空中を〕漂い得るさまは、水が波を押し上げ〔て海を漂っている〕るようなものである。聴くということを観じて真(実のありよう)に立ちかえり、「煩惱を引き起こす」塵相(対象のすがた)が起こらず、はつきりとして寂しずかであつたりとしていれば、如何なるものも漂い得ない。だから、「觀世音菩薩の名号を」念とめる者に大水で溺れないようにさせるのだ(声能く漂蕩すること、水の波を騰あぐるが如し。聽を觀じて真に旋り、塵相起こらず、虚明にして寂湛なれば、何物か能く漂わん。故に念ずる者をして大水に溺れざらしむ／声能漂蕩、如水騰波。觀聽旋真、塵相不起、虚明寂湛、何物能漂。故令念者大水不溺)」(卷六・T39:905c)と解釈している。また、『法華経』「普門品」には「若し大水の漂う所と為るも、其の名号を称とうれば、即ち浅処を得ん(若為大水所漂、称其名号、即得浅处)」(T9:56c、岩波文庫本① p.212)とある。

(12) 心無殺害〓『義疏注経』は、「妄想(誤った想念)が生じたり滅したりすると、「それは」法身(真理としての身体)を殺し、慧命(生命に喩えられた智慧)を害い得る(妄想生滅すれば、能く法身を殺し、能く慧命を害す／妄想生滅、能殺法身、能害慧命)」(卷六・T39:905c)とする。

- (13) 令諸衆生：鬼不能害』『義疏注経』は、「もし惑が断ちきられば、真実の本性が傷なわれることはない。だから、「悪」鬼〔が住まう〕国に入っても、〔そうした悪〕鬼が危害を加えることはできない（苟しくも惑断絶すれば、真性傷なうこと無し。故に鬼国に入るも、鬼、害すること能わず／苟惑断絶、真性無傷。故入鬼国、鬼不能害）」（卷六・T3905c）とする。また、『法華経』「普門品」には「若し百千万億の衆生有りて、金・銀・琉璃・車璩・馬瑙・珊瑚・虎珀・真珠等の宝を求めんが為に、大海に入らんに、仮使、黒風、其の船舫を吹きて、羅刹鬼の国に飄わし墮しむるも、其の中に若し乃至一人有りて、觀世音菩薩の名を称うれば、是の諸もろの人等は皆な羅刹の難を解脱るることを得ん（若有百千万億衆生、為求金銀琉璃車璩馬瑙珊瑚虎珀真珠等宝、入於大海、仮使黒風、吹其船舫、飄墮羅刹鬼国、其中若有乃至一人、称觀世音菩薩名者、是諸人等皆得解脱羅刹之難）」（T956c、岩波文庫本① p.214）とある。「羅刹」は「通力により人を魅し、また食うという。悪鬼の類」（『中村』 p.1402）のいふ。
- (14) 熏聞成聞』『義疏注経』に「妄聞を熏修し、真聞の性を成ず（熏修妄聞、成真聞性）」（卷六・T3906a）とあるのに拠って訳を試みた。

- (15) 六根銷復、同於聲聽』『義疏注経』は、「眼・耳・鼻・舌・身・意の六根のうちの、いずれか」一根が、「その認識の対象となる塵（境）との」対立を解消すれば、「その他」諸々の根もやはり〔対立が解消されて〕円融する（二根、対を亡ずれば、諸もろの根も亦た融す／一根治対、諸根亦融）」（卷六・T3906a）とし「対」については注(26)参照、『正脈疏』は、「六根銷復す」とは、「六根のうちの、いずれか」一根が、本源に返れば、六根は〔全て執着の対象から〕解脱れる（「ということな」のである。『声聴に同じ』とは、音声と聞性（耳聞という根性）とは、〔全て〕皆な形法がない（『六根銷復す』とは、一根本、源に反れば、六根解脱するなり。『声聴に同じ』とは、声と聞性とは、皆な形法無し／六根銷復者、一根本、源、六根解脱也。同於聲聴者、声と聞性、皆無形法）」（卷六・T26325d）とする。『楞嚴経』卷四には、「お前は、動靜・合離・恬変・通塞・生滅・明暗といった十二の変化の相にひきずられないで、〔六根

による執着から脱却すべきであって」一つの根を浄化するにつれて、妄覚との粘着から脱却して、内面の自覚に合致せよ。合致して本来の自覚に帰一すれば、本来の光を放つようになる。「こうして一根の」光が発揮されるなら、その他の五根の粘着も抜くがままに完全に離脱できる。「かくして真実の主体が回復されるのであって」対境にひきずられて起こす知見ではないから、その澄明さは六根に引き廻されないので「逆に」六根に託して澄明性が発揮される。そのために、六根は、「別々に機能しないで」相互に密接な関わりを持ちながらはたらくこととなる（汝但不循動靜合離、恬變通塞、生滅暗明、如是十二諸有為相、隨拔一根、脫粘內伏。伏歸元真、發本明耀。耀性發明、諸余五粘、應拔圓脫。不由前塵所起知見、明不循根、寄根明發。由是六根互相為用）」（119-123p、荒木訳・p.328）という、阿難に対する釈尊の教示が見られるが、觀世音菩薩は、自身が耳根を通してこれを成就していることを述べるのである。

(16) 能令衆生：刀段段壞 〓 『義疏注經』は、「心の水ははっきり澄んでいて、智慧の光は動くことがなければ、誰が自他（の区別）を為して危害を加えられるはずがあるうか。だから、どんな場合でも滞りがなく、自在に対処できるのだ（心水虚明にして、智光動くこと無ければ、誰か自他を為して当に害せらるべけん。故に能く触物に滞無く、刃を遊ばしむるに余有り／心水虚明、智光無動、誰為自他而當被害。故能觸物無滞、遊刃有余）」（卷六・T39-906a）とする。「遊刃有余」は、『莊子』「養生主」篇を典とする「物事を自在に処理するたとえ」（『漢辭海』p.125、岩波文庫本①p.92）。また、『法華經』「普門品」には「若し復た人有りて、当に害せらるべきに臨み、觀世音菩薩の名を称うれば、彼の執る所の刀杖は、尋に段段に壞れて解脫るることを得ん（若復有人、臨當被害、稱觀世音菩薩名者、彼所執刀杖、尋段段壞而得解脫）」（T036c、岩波文庫本④p.214）とある。

(17) 使其兵戈、猶如割水、亦如吹光 〓 『解蒙鈔』は、「呉興云」として、『淮南子』に云う『光は見る可くして握る可からず、水は循わしむ可くして壞す可からず』と。意を喩えること此くの如し（淮南子云、光可見不可握、水可

循不可壞。喻意如此」という吳興の淨覺法師仁岳の指摘を取りあげている（卷六・221.220c）。『淮南子』「原道訓」に「夫れ光は見る可くして握る可からず。水は循しがわしむ可くして毀こつ可からず（夫れ光可見而不可握、水可循而不可毀）」（新釈本・p.60）とある。

(18) 精明二「明潔至誠（明るく清らかで純粹なこと）」（『漢語』第九冊・p.219、縮印本① p.536）という意味。『楞嚴經』卷二にも「汝可微細披剥万象、析出精明淨妙見元、指陳示我、同彼諸物、分明無惑」（T19.112a、荒木訳・p.125）といつた用例が見え、荒木氏は「精密明瞭」と訳す。

(19) 聞熏精明、明徧法界、則諸幽暗性不能全二『義疏注経』は、「聞熏〔習〕という觀察の行が精密明瞭なものとなれば、智慧の光は、すでに法界せかに円融して円満に行きわたっている。かくて、無明ぼいの邪よまな暗闇は、永久に生じ得ない（聞熏の觀門、精明を成就すれば、智照、既に法界に融して円遍す。而して無明邪暗、永えに生ずること能わず／聞熏觀門、成就精明、智照既融法界円遍。而無明邪暗、永不能生）」（卷六・T39.906a）とし、『通議』は、「聞熏〔習の觀察の行〕が精密明瞭で、智慧が光を発すると、諸々の〔迷いの〕暗さは、永久に昏昧たり得ない（聞熏精明にして、慧性、光を発すれば、則ち諸もろの暗相、永えとこに昏くきこと能わず／聞熏精明、慧性発光、則諸暗相、永不能昏）」（卷六・Z19.105d）とする。

(20) 藥叉羅刹、鳩槃荼鬼、及毗舍遮、富單那等二「藥叉」は「夜叉」のこと。「人を傷害して食らう悪鬼とされる」（『中村』p.1373）。「羅刹」については、注（13）参照。「鳩槃荼鬼」は「人の精気を食らうといわれる悪鬼」（『中村』p.22）のいつ。「望月』「鳩槃荼」条に「形像は白馬頭人身にして、男は鉢を叩き、女は太鼓を打てり」（第一冊・p.68）とある。「毘舍遮」は「食肉鬼」（『中村』p.113）のこと。『望月』「毘舍闍」条に「此の鬼は、人の精気又は血肉を啖食するものなるを知るべし。：「中略」：形像は皆な餓鬼の如く、手に人の手足、或いは劫波羅を持す」（第五冊・p.433）とある。「劫波羅」は、「毘舍闍鬼らが左手に所持する器皿」のこと（『仏光』第三冊「劫波杯」条・

p2615)。「富単那」については、『望月』に「餓鬼中の勝なる者にして、其の身極めて臭穢に、且つ人畜に災害を与ふるものなるが如し」(第五冊・p.428)とある。

- (21) 能令衆生：目不能視 〓 『義疏注経』は、「業又など〔悪鬼〕の類は、皆な幽い気を受けているが、明は暗を破ることができる。だから、悪鬼の目では〔衆生の存在を〕見ることができないようにさせる(業又等の類は咸な幽気を受くるも、明は能く暗を破る。故に悪鬼をして目もて視ること能わざらしむ/業又等類咸受幽気、明能破暗。故令悪鬼目不能視)」(巻六・T39906a)とする。また、『法華経』「普門品」には「若し三千大千国土に、中に満つる夜叉・羅刹、来たりて人を悩まさんと欲するに、其の觀世音菩薩の名を称するを聞かば、是の諸もろの悪鬼、尚お悪眼を以て之を視ること能わず、況や復た害を加うるをや(若三千大千国土、満中夜叉羅刹、欲来恼人、聞其称觀世音菩薩名者、是諸悪鬼、尚不能以悪眼視之、況復加害)」(T950c、岩波文庫本⑤ p.244)とある。

- (22) 音性圓銷：所不能著 〓 『義疏注経』は、「〔執着の対象たる〕塵という累が互いに纏わりつくさまは監禁されたようなもので、〔眼・耳・鼻・舌・身・意の〕六根〔によって生じるところ〕の質碍は〔人を拘束する〕枷・鎖のようなものだ。〔外の対象に向かつて〕流〔れ出した聞くというはたらき〕を〔本性へと〕戻して〔執着の〕所〔となる音声との関わり〕がなくなつてしまえば、拘束による碍など生じない。このため、〔觀世音菩薩の名号を〕念える者は、枷・鎖〔による拘束〕から免れるのだ(塵累相い繋むること禁繫するが如く、六根の質碍は枷鎖の如し。既にして流れを入して所を亡ずれば、繫碍成ぜず。是の故に念ずる者は枷鎖より解脱る/塵累相繋如禁繫、六根質碍如枷鎖。既而人流亡所、繫碍不成。是故念者枷鎖解脱)」(巻六・T39906a)とし、可度『楞嚴経箋』は、「一切の音声の性(音声を音声たらしめているもの)が、悉く全て円満に消滅すれば、〔聴覚の対象となつて煩惱を引き起こす〕声塵が〔立ち現れることなど〕ない。『聴を觀じて返入す』とは、〔外の対象へと向かう〕聞〔くというはたらき〕を〔内へと〕返して自性を聞けば、既に〔本来に〕立ち返つて真性(真実不変の本性)を聞いている(とということ)の

である。この真〔実不変の本〕性は、形も相も〔持た〕ないから、枷・鎖〔によって拘束される〕といったことなどもない（一切の音声の性、悉く皆な円銷すれば、其の声塵無し。「聽を觀じて返入す」とは、則ち聞を返して自性を聞けば、既に乃ち返りて真性を聞くなり。此の真性、形無く相無ければ、枷鎖等の事も無し／一切音声之性、悉皆円銷、無其声塵。觀聽返入者、則返聞聞自性、既乃返聞真性。此之真性、無形無相、無枷鎖等事」〔卷六・28958〕とする。「觀聽返入」と類似の表現に、注〔11〕既出の「觀聽旋復」がある。「禁繫」は「監禁」〔漢語〕第七冊・p.150、縮印本④ p.143の意。また、『法華經』「普門品」には「設い復た人有りて、若しくは罪有り、若しくは罪無きも、杻械・枷鎖もて、其の身を檢め繫がれんに、觀世音菩薩の名を稱うれば、皆な悉く断壞して、即ち解脫るることを得ん（設復有人、若有罪、若无罪、杻械枷鎖、檢繫其身、稱觀世音菩薩名者、皆悉断壞、即得解脫）」〔T950c、岩波文庫本⑤ p.234〕とある。

(23) 經過險路 永明延寿は、「險しき路を經過す」とは、「欲界・色界・無色界の」三界という難所、「地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の」六趣という迷いの境界「を通り過ぎるといふこと」である（『險しき路を經過す』とは、即ち是れ三界の險有、六趣の迷津なり／經過險路者、即是三界之險有、六趣之迷津）〔宗鏡錄〕卷二五・T4895c〕とする。

(24) 滅音圓聞 賊不能劫 、『義疏注經』は、「音」声は〔衆生の〕心を劫かすことができる。善を害するものが賊である。〔音〕声が消え意が淨らかになって、慈〔悲の〕力でもって普く〔聞を正しく〕習慣づけければ、〔固定的・実体的な区別のない〕平等〔なる本性〕が手中に収まり、善悪が一体となる。だから、危険なところに足を踏み入れても、賊は劫かすことができないのだ（声能く心を劫かす。善を害うを賊と為す。声銷え意淨らかにして、慈力もて遍く熏ずれば、平等は懷に在りて、善惡同に貫く。故に險に渉るも、賊は劫かすこと能わざらしむ／声能劫心。害善為賊。声銷意淨、慈力遍熏、平等在懷、善惡同貫。故令涉險、賊不能劫）〔卷六・T3906a〕とする。また、『法華經』「普門品」には「若し三千大千国土に、中に満つる怨賊あらんに、一の商主有りて、諸もろの商人を將いて、重宝を齎持して、險しき路を經過せば、其の中に一人、是の唱言を作さん、『諸もろの善男子よ、恐怖するを得ること勿かれ。

汝等よ、应当まさに一心に觀世音菩薩の名号なごうを称となうべし。是の菩薩は、能く無畏を以て衆生に施したまう。汝等よ、若し名なを称となうれば、此の怨賊より、当に解脱まぬがるることを得べし。衆もろもろの商人は聞きて、俱ともに声こゑを發かけて言いわん、『南無觀世音菩薩』と。其の名なを称となうるが故に、即ち解脱まぬがるることを得ん（若三千大千国土、滿中怨賊、有一商主、將諸商人、齋持重宝、經過險路、其中一人、作是唱言、『諸善男子、勿得恐怖。汝等、应当一心稱觀世音菩薩名号。是菩薩、能以無畏施於衆生。汝等、若称名者、於此怨賊、当得解脱』。衆商人聞、俱發声言、『南無觀世音菩薩』。称其名故、即得解脱）」（Tc 90c、岩波文庫本① p.246）とある。

(25) 熏聞離塵：遠離貪欲 II 『義疏注経』は、「聴覚の対象となる」声塵おとが既になくなり、「認識の対象となる」色境しきが消え尽きれば、「欲するものを貪り求める」貪欲おんよくや「あれこれと思い巡らす」念慮ねんりょは、どこから生じてこようか。だから、衆生を貪欲から遠ざけるのだ（声塵既に亡じ、色境銷歇すれば、貪欲念慮、何れ従り生ぜん擬せんや。故に衆生をして貪欲を遠離せしむ／声塵既亡、色境銷歇、貪欲念慮、擬従何生。故令衆生遠離貪欲）」（卷六・T39.908a）とし、『要解』は、「衆生は、「その」欲愛・習氣が俗塵に合体するから、色（欲）に劫おびやかされるのだが、金剛三昧（堅固な禪定）でもって、聞を「正しく」習慣づけ（て対治し）、本性（の顕現）を成就することができ、「虚妄な」塵（に対する執着）から離れることができる。本性（の顕現）が成就すれば、欲愛は枯渴し、「虚妄な」塵（に對する執着）から離れば、「眼・耳・鼻・舌・身・意の」根と「色・声・香・味・触・法の」境（が向きあうことなどないから、妖あやしげな色）「欲」が生じようとも、劫おびやかすことなどできないのだ（衆生は欲習の塵に合するを以ての故に、色（に劫かされるも、能く金剛三昧を以て、聞を熏じ性を成じて、遂に能く塵を離る。性成ずれば則ち欲愛乾枯し、塵を離るれば則ち根境偶さざれば、故に妖色有り）と雖も、劫動すること能わず／衆生以欲習合塵故、為色劫、能以金剛三昧、熏聞成性、遂能離塵。性成則欲愛乾枯、離塵則根境不偶、故雖有妖色、不能劫動）」（卷一一・Z17.398c）とする。また、『法華経』「普門品」には「若し衆生有りて、婬欲多からんに、常に念じて觀世音菩薩を恭敬せば、便ち欲を離るることを得ん（若有

衆生、多於姦欲、常念恭敬觀世音菩薩、便得離欲」(1957a、岩波文庫本① p.216)とある。

(26) 無對所對 〓 「對」は「對立」の意。『正脈疏』は、「根・塵(感覺器官とその対象)〔という關係性〕を円融して一法ひとつとなるから、對立する〔主体となる〕根ねも、對立される〔客体となる〕塵ちんもない(根・塵融して一法と爲るが故に、能對の根無く、亦た所對の塵無し／根塵融為一法故、無能對之根、亦無所對之塵)」(卷六・T18336b)とする。「能所」については、『岩波』の「能動の主体を『能』と言ひ、受動の客体を『所』と言ふ。『能』『所』を冠して様々な仏教用語の對語を作る」(p.813)という解説が参考になろう。『正脈疏』が指摘する通り、「能對」 〓 根であり、「所對」 〓 塵(境)である。「無對所對」とは、根と塵(境)との對立が解消されて円融した状態をいう。

(27) 純音無塵：離諸瞋恚 〓 『義疏注經』は、「〔それぞれの〕音声の〔個々別々の〕差別ちがひが、〔心を靜かに統一させた〕三昧〔の状態〕でもって〔まじりけのない〕純〔粹絶對〕なものとなれば、〔聽覺の對象となつて心をけがす〕塵ちんは既に生じない。〔耳〕根ねが向きあふ〔對象となる〕ものがなく、順境(自己の心に従ひ応ずる好ましい對象)も違境(自己の心にとつて好ましくない對象)も〔立ち現れることが〕なければ、瞋恚いかりの心は、自然となくなる。だから、〔觀世音菩薩の名号を〕念となえる者に諸々の瞋恚いかりから離れさせるのだ(音声の差別、三昧もて能く純たれば、塵既に生ぜず。根偶する所無く、順違の境を得ざれば、瞋恚の心、自ら亡おのづからず。故に念ずる者をして諸もろの瞋恚を離れしむ／音声差別、三昧能純、塵既不生。根無所偶、順違之境不得、瞋恚之心自亡。故令念者離諸瞋恚)」(卷六・T39306a)とし、『要解』は、「音性(音を音たらしめているもの)が純〔粹絶對〕で淨よらかであれば、もう虚妄な塵ちんなどない。だから、〔感覺器官とその対象である根と境とが〕円〔滿に相即〕融〔合〕して矛盾することがなく、〔能動の主体と受動の客体という〕能所の對立がない。矛盾することなく對立することがなければ、瞋いかるといふことがないのだ(音性純淨なれば、復た妄塵無し。故に円融して違ふこと無く、能所の對無し。違ふこと無く對すること無ければ、則ち瞋いからざるなり／音性純淨、無復妄塵。故円融無違、無能所對。無違無對、則不瞋矣)」(卷一・T17398c)とする。また、『法華經』「普門品」には「若

し瞋恚多からんに、常に念じて観世音菩薩を恭敬せば、便ち瞋を離るることを得ん（若多瞋恚、常念恭敬観世音菩薩、便得離瞋）（1957a、岩波文庫本④ p.246）とある。

(28) 阿顛迦 〓 『正脈疏』は、「阿顛迦は、ここ〔中国〕では『無善心』と言う。「善い心が無いうえに」さらに愚迷〔の度合い〕が最も重度な者〔のこと〕である（阿顛迦、此には『無善心』と云う。又た痴の最も重き者なり／阿顛迦、此云無善心。又痴之最重者也）（巻六・Z18-326b）とし、『通議』は、「阿顛迦は、「救われる見込みのない」一闍提（のこと）である。ここ〔中国〕では『無信根』と言う。実に愚痴の闇が心を覆うから、実〔際に教えを〕信（じ）る心」を生じないのだ（阿顛迦は、一闍提なり。此には『無信根』と言う。良に痴暗、心を覆うを以ての故に、実信を生ぜず／阿顛迦、一闍提也。此言無信根。良以痴暗覆心故、不生実信）（巻六・Z19-106a）とする。『正脈疏』は、「迷いが最も重い者」と指摘し、『通議』は、「一闍提」すなわち「善根を断じていて救われる見込みのない者」（『中村』p.64）と指摘する。『中村』「阿顛底迦」条には「とうていニルヴァーナに入ることのできない者」（p.6）とある。

(29) 銷塵旋明 〓 永離癡暗 〓 『義疏注経』は、「心をけがす」塵暗を消し去り、真明に立ちかえれば、世界と身心は「一点のくもりさえなく」洞然としていて碍がなく、一切はただ覚りにほかならない。誰か愚痴の闇を生じようか。だから、「救われる見込みのない」一闍提に実〔際に教えを〕信（じ）る心」を生じさせるのだ（塵暗を消除し、真明に旋復すれば、世界と身心は、洞然として碍無く、一切唯覚なり。誰か痴暗を為さん。故に闍提をして威な実信を生ぜしむ／消除塵暗、旋復真明、世界身心、洞然無碍、一切唯覚。誰為痴暗。故令闍提成生実信）（巻六・T39-906a）とする。また、『法華経』「普門品」には「若し愚痴多からんに、常に念じて観世音菩薩を恭敬せば、便ち痴を離るることを得ん（若多愚痴、常念恭敬観世音菩薩、便得離痴）」（1957a、岩波文庫本④ p.248）とある。

(30) 不動道場 〓 同じ表現を用いながら、より有名な個所として、『楞嚴経』巻四の「道場を動かずして、十方界に遍く、身は十方無尽の虚空を含みて、一毛の端に於いて宝王刹を現じ、微塵裏に坐して大法輪を転ず（不動道場、

遍十方界、身含十方無尽虚空、於一毛端現宝王刹、坐微塵裏轉大法輪」(T19:21a)があり、『大慧語録』卷二一 (T47:901b、石井訳・p.160)にそのまま引用されるなど、禪籍にも散見される表現である。「不動道場」の四字に限って言えば、『六祖壇経』「付嘱第十」にも、「若し一切処に於いて、行住坐臥、純一直心ならば、道場を動かさずして、真に淨土を成ず。此れを『一行三昧』と名づく(若於一切処、行住坐臥、純一直心、不動道場、真成淨土。此名一行三昧)」(T48:861b)とある。

(31) 法王子 法王は仏をさす。法王子とは仏のいとし子の意で、菩薩をさす(荒木訳・p.46)。『楞嚴経』をはじめ大乘經典にしばしば見られる語であり、『楞嚴経』では、ここを含めて17個所に確認できる。

(32) 融形復聞 誕生福德智慧之男 『義疏注経』は、「物質的な」形碍を融合(して障りのない状態に)すれば、真正の間に立ちかえる。だから、道場でじっとしたままで、世間に分け入り、限定なき身体で広く十方に至り、法王の種姓(系譜)を継承して途絶えさせることがない。「心を静かに統一させて安定させる」三昧力でもって福(徳と智)慧が具わっているから、必ずや男(子の誕生)を求める者は、皆な(その)願いを実現するはずだ(形碍を融通すれば、真聞に旋復す。所以に道場を動かさずして、世界に渉入し、身に限量無く、遍く十方に至り、法王の種姓を紹継して断ぜず。三昧力もて福慧具わるに由るが故に、応に男を求むる者には、皆な虚願無かるべし/融通形碍、旋復真聞。所以不動道場、渉入世界、身無限量、遍至十方、紹継法王種姓不断。由三昧力福慧具故、応求男者、皆無虚願) (卷六・T39:906b)とする。また、『法華経』「普門品」には「若し女人有りて、設し男を求めんと欲して、觀世音菩薩を礼拝し供養せば、便ち福德・智慧の男を生まん(若有女人、設欲求男、礼拝供養觀世音菩薩、便生福德智慧之男)」(T95a、岩波文庫本① p.248)とある。

(33) 圓通 無碍のはたらき。『岩波』に「あまねく通じ達すること。全てにわたって滞ることなく融通無碍であること。仏・菩薩の悟りの境地をいう。『円通無碍』『円通自在』などと用いる。『首楞嚴経』卷五・卷六では、二

十五人の菩薩・阿羅漢が諸々の方便によって円通を得たことが記され、そのうち、耳根を通じて悟りを得た観世音菩薩が最上であるとされている。このことから、観世音菩薩のことを『円通大士』という(p.66)とある。

(34) 大圓鏡Ⅱ大円鏡智のこと。「仏のもっている四智(大円鏡智・平等性智・妙觀察智・成所作智)の一。一切の分別を離れ、そのはたらきは微細であって、しかも全ての対境を照らすこと大円鏡の如くであるから、かく名づけられた」(荒木訳・p.336)。例えば、『楞嚴経』卷四に「世尊よ、果位の中の、菩提・涅槃・真如仏性・菴摩羅識・空如来藏・大円鏡智の如きは、是れ七種の名、称谓別なりと雖も、清浄円満にして、体性堅凝なること、金剛王の如くにして、常住不壊なり(世尊、如果位中、菩提、涅槃、真如、仏性、菴摩羅識、空如来藏、大円鏡智、是七種名、称谓別、清浄円満、体性堅凝、如金剛王、常住不壊)」(T19.123c、荒木訳・p.336)とある。

(35) 空如来藏Ⅱ「妄念と合致せず、無量の功德を含蔵する本心の意」(荒木訳・p.336)。「明照無二」が「大円鏡」に対応し、「含十方界」が「空如来藏」に対応する。注(34)も併せて参照。

(36) 六根圓通：衆人愛敬、有相之女Ⅱ『義疏注経』は、「(眼・耳・鼻・舌・身・意の)六根が円満に行きわたり、(異なつた別々のものが融けあつて障りなく)融通して明らかに照しだし、十方を包み込んで顕現し、二つとしてない唯一の宝覺たることを『大円鏡』(大円鏡智)と名づける。さらに、数えきれないほどの諸々の仏に付き従い、量りしれないほどの法門を受けて(自らのうちに)収め容れ、(法門を)失わず壊さないことを『空蔵』(空如来藏)と名づける。女徳(女性が身につけるべき道徳)や坤儀(母としての模範)が、柔順さや聡明さ、志の強さといったものを育むことで、相好が円満に備わり、この(観世音菩薩の名号を)念えることによつて(女子の誕生を)求めるから、(その功德によつて、優れた女子を)生むことができるのである(六根円満し、融通照明して、十方を含現し、無二無別にして唯一の宝覺たるを、『大円鏡』と名づく。復た能く微塵の諸仏に承順し、無量の法門を受領含容し、失わず壊さざるを、名づけて『空蔵』と為す。女徳・坤儀の、承順・柔明・真正を資生するを以て、相好円満に備わり、此の念に由

りて求むるが故に、能く生まるるなり／六根円遍、融通照明、含現十方、無二無別唯一宝覺、名大円鏡。復能承順微塵諸仏、受領含容無量法門、不失不壞、名為空藏。以女徳坤儀、資生承順柔明貞正、相好円備、由此念求故、能生也」(卷六・T29-906b)とす。また、『法華経』「普門品」には「設し女を求めんと欲せば、便ち端正有相の女の、宿、徳本を殖えしをもて、衆人に愛敬せらるるを生まん(設欲求女、便生端正有相之女、宿殖徳本、衆人愛敬)」(T97a、岩波文庫本・p.29)とある。

(37) 三千大千世界 、『中村』に「略して三千世界ともいふ。古代インド人の世界観による全宇宙。須弥山を中心にして、その周囲に四大洲があり、そのまわりに九山八海があるが、これが我々の住む世界で一つの小世界という。上は色界の初禪天から、下は大地の下の風輪にまで及ぶ範囲をいう。この世界のうちには、日・月・須弥山・四天下・四天王・三十三天・夜摩天・兜率天・楽變化天・他化自在天・梵天を含む。この一つの世界を千集めたのを、一つの大千世界とよぶ。この大千世界を千集めたのを、一つの中千世界、中千世界をさらに千合わせたものを、一つの大千世界とよぶ。∴「中略」∴この大千世界は千を三回集めたわけであり、小・中・大の三種の千世界から成るので、三千世界または三千大千世界という。三千の世界という意味ではなく、千の三乗の数の世界という意味である」(『中村』p.180)とある。

(38) 百億日月 例えば、『大智度論』卷九に「百億の須弥山、百億の日月を、名づけて三千大千世界と為し、是くの如き十方の恒河沙等の三千大千世界、是れを名づけて一仏世界と為し、是の中に更く余仏無し(百億須弥山、百億日月、名為三千大千世界、如是十方恒河沙等三千大千世界、是名為一仏世界、是中更無余仏)」(大智度初品中十方諸菩薩來積論第十五(T5-125b)とある。また、『望月』「三千大千世界」条に「千の中千世界を大千世界と名づく。百億の日月、百億の須弥山、百億の四天下、百億の六欲天、百億の初禪天、百億の二禪天及び千の三禪天あり」(第二冊・p.159b)とある。

(39) 六十二恒河沙數／六十二恒河沙諸法王子。「恒河沙」については、『中村』に「恒河はガンジス河のこと。すなわち、ガンジス河にある砂のように多い、の意。無数なることにたとえていう」(P.40a)とある。『法華経』「普門品」などに見られるように、「六十二億恒河沙」(T95a, 岩波文庫本 P.248) という表現もある。いずれにせよ、「数えきれない程の」という意味である。「法王子」については、注(31) 参照。『中村』「六十二億恒河沙菩薩」条に「六十二億のガンジス河の砂の数にも等しい数の菩薩の意。三千大千世界に住する菩薩の教」(P.15a)とある。

(40) 圓通本根 、『楞嚴經箋』卷六に「円通の本根」とは、耳根が真正の聞性を起し、微妙にその耳(という)門の中において(この法界を)包み込む(ことである)。法界は依報(身のよりどころとなる国土世界)であり、自(らの)身は正報(過去の業の報いとして得た有情の身)である。依正の二報、「すなわち」身と「国」土が「融合して」互いに一体となつていることこそが、法身(真理そのものとしての仏の身体)である(円通の本根)とは、則ち耳根、真聞の性を發起し、微妙に其の耳門の中に向いて、含裹し包容す。法界は是れ依報にして、自身は是れ正報なり。依正の二報、身土交(ご)も参(ま)り合(あ)はるは、乃ち法身なり／円通本根、則耳根發起真聞之性、微妙向其耳門之中、含裹包容。法界は依報、自身は正報。依正二報、身土交(ご)参(ま)り合(あ)はる、乃ち法身なり」(Z8879c-d)とあり、『楞嚴經直指』卷六に「本根とは、『観世音』菩薩が自ら『修め得た』と言う円(満融)通の本根であつて、耳門を指すのである(本根)とは、菩薩自ら『修むる所』と謂う円通の本根にして、耳門を指すなり／本根、菩薩自謂所修円通之本根、指耳門也」(Z22403b)とある。

(41) 由我所得、圓通本根…周徧法界 、『義疏注経』は、「観音(菩薩)が修めた(聞・思・修の)三慧を手がかりに悟入する理由を先に(取りあげて)出したのは、「それが」諸々の修行の根本だからである。それぞれの仏は教えを説くにあたつて、皆な音声でもつて説き、それぞれの機(教えられる相手)は(その教えを)領悟するにあつて、悉く(教えを)聞(いて)了解する智(慧)によ(つて)領悟する。…〔中略〕…〔耳〕根の束縛を(本

来のありように」戻して真際に帰れば、澄明な心は靈妙であつて、一つの境（事物）と多くの境（事物）は（互いに融けあつて障りなく）融通し、もともと「静まりかえつて」ゆつたりとした覺りは円満に成就し、彼・此の名称（や概念）は「固定的・実体的な区別のない」平等なものとなる。「そうなる」と一切の身体は（この）一身にほかならないから、『微妙に含容す』と言う。一身即一切身であるから、故に『法界に周遍す』と言う。これこそ「名号を持つ」とする者たちにもたらされる「福德が等しい理由なのである（観音の修する所の三慧に從りて入る所以を先出するは、是れ衆行の根本なればなり。仏仏教を演ぶるに、皆な音声を以てし、機機領悟するに、尽く聞慧に由る。：「中略」：根結を復して真際に歸すれば、元明の心は妙にして、一多の境は融通し、本湛の覺は円にして、彼此の名は平等なり。一切の身は即ち一身なるを以ての故に、『微妙に含容す』と云う。一身即一切身なれば、故に『法界に周遍す』と云う。此れ即ち福等しきの所以なり／先出所以観音所修從三慧入、是衆行之根本也。仏仏演教、皆以音声、機機領悟、尽由聞慧。：「中略」：復根結而歸真際、元明心妙、一多之境融通、本湛覺円、彼此之名平等。以一切身即一身故、云微妙含容。一身即一切身、故云周遍法界。此即福等之所以也）」（卷六・T3909b-c）とする。

(42) 能令衆生…由我修習、得真圓通 〓 『義疏注経』は、「(固定的・実体的な区別のない) 平等という真理を自ら〔の心で〕証るから、かくて他者に平等の福德を手に入れさせるのである（平等の理を自証するに由るが故に、遂に他をして平等の福を得さしむるなり／由自証平等理故、遂令他得平等福也）」（卷六・T3909c）とする。また、『法華経』「普門品」には「(仏は無尽意菩薩に告げたまふ)」：「無尽意よ、若し人有りて、六十二億恒河沙の菩薩の名字を受持し、復た形を尽くすまで飲食・衣服・臥具・医薬を供養せば、汝が意に於いて云何ん。是の善男子・善女人の功德多しや不や」と。無尽意の言わく、『甚だ多し、世尊よ』と。仏は言もつ、『若し復た人有りて、觀世音菩薩の名号を受持し、乃至、一時も禮拜し供養せば、是の二人の福は、正に等しくして異なること無く、百千万億劫に於いても、窮め尽くす可からざらん。無尽意よ、觀世音菩薩の名号を受持せば、是くの如き無量無辺の

福德の利を得ん』と。(…無尽意、若有人、受持六十二億恒河沙菩薩名字、復尽形供養飲食衣服臥具医薬、於汝意云何。是善男子善女人、功德多不」。無尽意言、「甚多、世尊」。仏言、「若復有人、受持觀世音菩薩名号、乃至一時、礼拝供養、是二人福、正等無異、於百千万億劫、不可窮尽。無尽意、受持觀世音菩薩名号、得如是無量無辺福德之利」】(T957a、岩波文庫本④ p.28) とある。

(43) 施無畏 、『中村』に「何ものをもおそれない力を与えること。色々のおそれを取り去って救うこと。安心させること。三施の一つ」(p.82) とある。『法華経』「普門品」に「無尽意よ、是の觀世音菩薩は、是くの如き功德を成就して、種種の形を以て、諸もろの国土に遊び、衆生を度脱たくうなり。是の故に、汝等よ、应当まさに一心に觀世音菩薩を供養すべし。是の觀世音菩薩摩訶薩は、怖畏おそれの急難の中に於いて、能く無畏を施す。是の故に、此の娑婆世界、皆な之を号なづけて『施無畏者』と為す(無尽意、是觀世音菩薩、成就如是功德、以種種形、遊諸国土、度脱衆生。是故汝等、应当一心供養觀世音菩薩。是觀世音菩薩摩訶薩、於怖畏急難之中、能施無畏。是故此娑婆世界、皆号之為施無畏者)】(T957b、岩波文庫本④ p.256) とあるように、「施無畏」は、觀世音菩薩の異名でもある。

《補注》「十四種の功德」対照表

『楞嚴経』	『法華経』
《1》 令彼十方苦恼衆生、觀其音声、即得解脱	(1) 若有無量百千万億衆生、受諸苦惱、聞是觀世音菩薩、一心称名、觀世音菩薩、即時觀其音声、皆得解脱
《2》 令諸衆生、設入大火、火不能燒	(2) 若有持是觀世音菩薩名者、設入大火、火不能燒
《3》 令諸衆生、大水所漂、水不能溺	(3) 若為大水所漂、称其名号、即得浅处

<p>《4》 令諸衆生、入諸鬼国、鬼不能害</p>	<p>(4) 若有百千万億衆生、為求金銀琉璃車璫馬瑙珊瑚琥珀真珠等宝、入於大海、假使黑風、吹其船舫、飄墮羅刹鬼国、其中若有乃至一人、称觀世音菩薩名者、是諸人等皆得解脫羅刹之難</p>
<p>《5》 能令衆生、臨当被害、刀段段壞、使其兵戈、猶如割水、亦如吹光、性無搖動</p>	<p>(5) 若復有人、臨当被害、称觀世音菩薩名者、彼所執刀杖、尋段段壞而得解脫</p>
<p>《6》 能令衆生、葉叉羅刹、鳩槃荼鬼、及毘舍遮、富单那等、雖近其傍、目不能視</p>	<p>(6) 若三千大千国土、滿中夜叉羅刹、欲來恼人、聞其称觀世音菩薩名者、是諸惡鬼、尚不能以惡眼視之、況復加害</p>
<p>《7》 能令衆生、禁繫枷鎖、所不能著</p>	<p>(7) 設復有人、若有罪、若無罪、杻械枷鎖、檢繫其身、称觀世音菩薩名者、皆悉斷壞、即得解脫</p>
<p>《8》 能令衆生、經過險路、賊不能劫</p>	<p>(8) 若三千大千国土、滿中怨賊、有一商主、將諸商人、齎持重宝、經過險路、其中一人、作是唱言、「諸善男子、勿得恐怖。汝等、应当一心称觀世音菩薩名号。是菩薩、能以無畏施於衆生。汝等、若称名者、於此怨賊、当得解脫」。衆商人聞、俱发声言、「南無觀世音菩薩」。称其名故、即得解脫</p>
<p>《9》 能令一切多姪衆生、遠離貪欲</p>	<p>(9) 若有衆生、多於姪欲、常念恭敬觀世音菩薩、便得離欲</p>
<p>《10》 能令一切忿恨衆生、離諸嗔恚</p>	<p>(10) 若多瞋恚、常念恭敬觀世音菩薩、便得離瞋</p>
<p>《11》 能令一切昏鈍性障諸阿顛迦、永離痴暗</p>	<p>(11) 若多愚痴、常念恭敬觀世音菩薩、便得離痴</p>
<p>《12》 能令法界無子衆生、欲求男者、誕生福德智慧之男</p>	<p>(12) 若有女人、設欲求男、礼拜供養觀世音菩薩、便生福德智慧之男</p>
<p>《13》 能令法界無子衆生、欲求女者、誕生端正福德柔順、衆人愛敬、有相之女</p>	<p>(13) 設欲求女、便生端正有相之女、宿殖德本、衆人愛敬</p>
<p>《14》 能令衆生、持我名号、与彼共持六十二恒河沙諸法王子、二人福德、正等無異</p>	<p>(14) 若復有人、受持觀世音菩薩名号、乃至一時、礼拜供養、是二人福、正等無異、於百千万億劫、不可窮尽</p>

(本多道隆)

〔四〕

世尊、我又獲是圓通、修證無上道故、又能善獲四不思議無作妙德。¹一者、由我初獲妙妙聞心、心精遺聞、²見聞覺知、不能分隔、成一圓融清淨寶覺。⁴故我能現衆多妙容、能說無邊祕密神呪。⁵其中或現一首三首、五首七首、九首十一首、如是乃至一百八首、千首萬首、八萬四千燦迦羅首、⁶二臂四臂、六臂八臂、十臂十二臂、十四十六、十八二十、至二十四、如是乃至一百八臂、千臂萬臂、八萬四千母陀羅臂、⁷二目三目、四目九目、如是乃至一百八目、千目萬目、八萬四千清淨寶目、或慈或威、或定或慧、救護衆生、得大自在。⁹二者、由我聞思、脫出六塵、如聲度垣、不能爲礙。故我妙能現一一形、誦一一呪、其形其呪、能以無畏、施諸衆生。是故十方微塵國土、皆名我爲施無畏者。¹⁰三者、由我修習本妙圓通清淨本根、所遊世界、皆令衆生、捨身珍寶、求我哀愍。¹¹四者、我得佛心、證於究竟、能以珍寶、種種供養十方如來、傍及法界六道衆生。求妻得妻、求子得子、求三昧得三昧、求長壽得長壽、如是乃至求大涅槃、得大涅槃。¹³佛問圓通、我從耳門圓照三昧、緣心自在、¹⁵因入流相、得三摩提、¹⁶成就菩提、斯爲第一。世尊、彼佛如來、歎我善得圓通法門、於大會中、授記我爲觀世音號。由我觀聽、十方圓明、故觀音名、徧十方界。¹⁹

【校記】(一) 蜜 || 大正藏は「密」に作る。(二) 羅 || 大正藏は「囉」に作る。

*

世尊よ、我れ又た是の圓通を獲て、無上道を修證するが故に、又た能く善く四不思議無作の妙徳を獲たり。

一には、我れ初め妙妙の聞心を獲て、心精にして聞を遺るるに由り、見聞覺知、分隔すること能わず、一の圓融清淨の寶覺を成ず。故に我れ能く衆多の妙容を現じ、能く無邊の祕密の神呪を説く。其の中に、或い

は一首・三首、五首・七首、九首・十一首、是の如く乃至二百八首、千首・萬首、八萬四千の燦迦羅の首、二臂・四臂、六臂・八臂、十臂・十二臂、十四・十六、十八・二十より二十四に至り、是の如く乃至二百八臂、千臂・萬臂、八萬四千の母陀羅の臂、二目・三目、四目・九目、是の如く乃至一百八目、千目・萬目、八萬四千の清淨の寶目を現じ、或いは慈、或いは威、或いは定、或いは慧もて、衆生を救護し、大自在を得さしむ。

二には、我れ聞思するに由りて、六塵を脱出すること、聲の垣を度るに、礙を爲すこと能わざるが如し。故に我れ妙に能く一一の形を現じ、一一の呪を誦し、其の形と其の呪、能く無畏を以て、諸もろの衆生に施す。是の故に十方微塵の國土、皆な我れを名づけて『施無畏者』と爲す。

三には、我れ本妙圓通の清淨の本根を修習するに由りて、遊ぶ所の世界、皆な衆生をして、身と珍寶を捨て、我れに哀愍を求めしむ。

四には、我れ佛心を得て、究竟を證すれば、能く珍寶を以て、種種に十方の如來を供養し、傍ら法界の六道の衆生に及ぶ。妻を求むれば妻を得さしめ、子を求むれば子を得さしめ、三昧を求むれば三昧を得さしめ、長壽を求むれば長壽を得さしめ、是の如く乃至大涅槃を求むれば、大涅槃を得さしむ。

佛、圓通を問えば、『我れ、耳門圓照三昧に從りて、緣心自在にし、入流の相に因りて、三摩提を得、菩提を成就す、斯を第一と爲す』とす。世尊よ、彼の佛如來は、我れ善く圓通の法門を得ることを歎じ、大會中に於いて、我れに授記して『觀世音』の號を爲す。我れ聽を觀じ、十方に圓明なるに由り、故に『觀音』の名、十方界に徧し』と。

*

世に尊きお方よ、私は、さらに、この円〔滿にして融〕通〔なる無碍のはたらき〕を得て、無上道を修行

によって悟りましたので、『四不思議無作の妙徳（思慮を超えた無作の妙なる四つの徳）』をも手に入れておきます。

一つには、私は初めに『妙妙なる聞心（声境の粘着から脱して円満に聞くことができる心）』を手に入れており、〔また、その〕心は精緻で聞（く）主体と聞かれる客体とを忘れておりますから、見聞覚知は〔別個に〕分離し得ず、〔耳根を浄化することにより、他の五根も浄化されて見聞覚知が〕円融した清浄な宝覚を成就しております。だから、私は多くの妙なる容を現出し、限りな（く）奥深（い）秘密の神呪を説くことができるのです。そうしたなかで、ある場合には、一首・三首・五首・七首・九首・十一首から、同様に百八首・千首・万首・八万四千首に至るまでの燦迦羅の首を、〔そして〕二臂・四臂・六臂・八臂・十臂・十二臂・十四臂・十六臂・十八臂・二十臂から二十四臂と、同様に百八臂・千臂・万臂・八万四千臂に至るまでの母陀羅〔を結んだ〕臂を、〔さらには〕二目・三目・四目・九目から、同様に百八目・千目・万目・八万四千目に至るまでの清浄な宝目（真理を見る眼）を現出し、ある場合には慈悲でもって、ある場合には威徳でもって、ある場合には禅定でもって、ある場合には智慧でもって、衆生を救（済して加）護し、〔何ものにも執われず障げられない〕大（いなる）自在さを〔衆生に〕手に入れさせるのです。

二つには、私は、聞と思（の實踐）を行なっておりますので、〔あたかも〕音声が垣根を難なく越え出るかのように、〔色・声・香・味・触・法の〕六塵〔への執着〕から脱け出ております。だから、私は、靈妙に一つ一つの形を現出して、一つ一つの呪を誦えることができ、その形と呪とは、無畏（畏れ無き状態）を諸々の衆生に施すことができます。こうしたわけで、十方〔に存在する〕微塵の国土〔にいる者たち〕は、皆な私のことを『施無畏者（衆生を慰めて畏れを無からしめる者）』と名づけているのです。

三つには、私は、本来靈妙にして円〔満にして融〕通なる清浄な本根を修めておりますので、遊行した

〔先の〕世界で、悉く衆生に〔その〕身と珍しい宝石を〔惜しまず喜〕捨させ、私に〔すがって〕哀愍を求めるようにする〔ことができる〕のです。

四つには、私は仏心を得て、究竟を証っておりますので、珍しい宝石でもって十方〔におわす〕如来を様々なかたちで供養し、広く〔その功德を〕法界のうちの六道で苦しむ衆生にまで及ぼすことができるのです。妻を求めれば妻を手に入れさせ、子を求めれば子を手に入れさせ、三昧を求めれば三昧を手に入れさせ、長寿を求めれば長寿を手に入れさせ、同様に、大いなる涅槃（煩惱を滅した安楽な状態）を求めれば、大いなる涅槃を手に入れさせるのです。

仏が〔私の〕円〔満にして融〕通〔なる無碍のはたらき〕について問われるなら、〔こうお答え致しましょう。〕『私は、耳〔という〕門〔から深入して得られる、一切を差別なく〕円〔満に〕照〔し出す〕三昧を手がかりとして、〔音を〕縁〔として悟入する〕心を〔執われのない〕自在〔な状態〕にし、〔外の対象に向かつて〕流〔れ出した聞くというはたらき〕を〔本性へと〕戻すという相によって、三摩提を得て菩提を成就すること、これを第一義と致します』〔と〕。世に尊きお方よ、かの〔観世音〕仏如来は、私が十分に円〔満にして融〕通〔なる無碍のはたらき〕の法門を得ていることを感嘆され、法会の会座で、私に〔対し〕、授記〔すなわち、将来に必ずや成仏するであろうという保証を〕されて『観世音』の号をお与えくださいました。私〔こと観世音菩薩〕は、聴くということを観じ、十方で円〔満にして霊〕明であることから、〔私の〕『観音』という名前が、十方界に〔浸透し〕行きわたることになったのです』と。

*

(1) 世尊…四不思議無作妙徳 〓 観世音菩薩は、十四種の無畏功徳に続き、以下で、自らの「四不思議無作の妙徳（思慮を超えた無作の妙なる四つの徳）」について語る。『義疏注経』は、「内なる徳が充実しなければ、外に向かつて

現れる作用は起こらない。金剛三昧（堅固な禪定）でもって、本根に四無量心（慈無量・悲無量・喜無量・捨無量）を熏じつけ、「その結果としての」果証によって、真実の徳が現前するから、「慈・悲・喜・捨の」四事が成就する。「それは」全て不可思議で、作為することなく立ち現れるのだ（内徳充たざれば、外用起こらず。金剛三昧も本に四無量心を熏じ、斯の果証に由りて、実徳現前するを以ての故に、四事を成す。俱に不思議にして、無作にして現ず／内徳不充、外用不起。以金剛三昧熏本四無量心、由斯果証、実徳現前故、成四事。俱不思議、無作而現」（卷上六・139.96c）とする。『義疏注経』に見える「熏本」とは、「熏本修習（本根を熏習する修行）」（『金剛経会解』卷上・138.96c）という意味で、ここでは、「本」の下に名詞を伴うことから、「本性」や「本識」や「本根」といった根本のところは何らかのものを熏じつけるという意味であろう。例えば、『成唯識論』卷二に「其の聞熏習は、唯だに有漏のみに非ず、正法を聞く時も亦た本有の無漏種子を熏じて、漸く増盛し、展転して乃ち出世の心を生ずるに至らしむ（其聞熏習、非唯有漏、聞正法時亦熏本有無漏種子、令漸増盛、展転乃至生出世心）」（132.96c）とあり、また、浄影寺慧遠（五三三〜五九二）の『大乘義章』卷三は、人空・我空の二空を観ずる修行について述べたなかで、「熏本」という語を用いながら、次のように説いている。

修にも亦た二有り。一に人空を觀じ、二に法空を觀ず。此の二の中に於いて、先ず聞慧を起こし、二無我（人無我・法無我）を聞して、本識に熏ず。本識、熏ぜられて、聞熏習を成す。本識の中に於いて、真有り妄有り。真是淨熏を受け、妄は染熏を受く。真、熏を受け已われば、転じて無明を熏じ、無明をして薄からしむ。無明薄きが故に、無明の中に於いて、無始の積習、我見の種子、随して漸く薄し。此の種薄くなり已わりて、阿陀那（第八識である執持識）の我執を起こすこと漸く輕し。此の執輕くなり已わりて、六識の我見を起こすことも亦た輕し。此の見輕くなり已わりて、聞を起こすこと転た勝る。此れを以て聞を転じて、還つて本識を熏ず。是くの如く展転して、末を以て本を熏ずれば、本還つて末を熏ず。思修も亦た然り。

(修亦有二。一觀人空、二觀法空。於此二中、先起聞慧、聞二無我、熏於本識。本識被熏、成聞熏習。於本識中、有真有妄。真受淨熏、妄受染熏。真受熏已、転熏無明、令無明薄。無明薄故、於無明中、無始積習、我見種子、隨而漸薄。此種薄已、起阿陀那我執漸輕。此執輕已、起於六識我見亦輕。此見輕已、起聞転勝。以此転聞、還熏本識。如是展転、以末熏本、本還熏末。思修亦然。) (T44:528a)

(2) 妙妙聞心 〓 『解蒙鈔』は、『惟愨疏』の『妙妙聞心』とは、初めの『妙』(の字)は「耳で聞かれる対象である」声境の粘着から脱(するさまを表現)し、後の『妙』(の字)は円満に聴いて、聴き逃すことがない(さまを表現している)。(『妙妙聞心』とは、初めの『妙』は則ち声境を脱粘し、後の『妙』は則ち円聴して遺すこと無きなり/妙妙聞心者、初妙則脱粘声境。後妙則円聴無遺) (卷六・221:222d) という解釈を引用している。

(3) 心精遺聞 〓 『義疏注経』は、「粗雑でないことを『精』と言ひ、「あらゆる差別的な」相を超え離れていることを『遺』と言ひ(麤に非ざるを「精」と曰ひ、相を離るるを「遺」と曰ひ/非麤曰精、離相曰遺) (卷六・139:96c) とする。「離相」とは「全ての差別的なすがた(有為の相)を超え離れていること」(『中村』p.147)。「解蒙鈔」所引の『惟愨疏』の割注には「遺聞」とは、聞(聞く主体)と所聞(聞かれる客体)「という関係性」が尽き「果ててなくなつて」いる(遺聞とは、即ち聞と所聞の尽くるなり/遺聞、即聞所聞尽) (卷六・221:222e) とある。これらの解釈を参考に、「遺」を「遺る」と訓み、「心は精緻で聞(く主体と聞かれる客体と)を忘ず」と訳した。

(4) 一者：成一圓融清淨寶覺 〓 『義疏注経』は、「これは(以下の靈妙な四つの)徳の根本について述べているのである。聞性(耳聞という根性)の真実のすがたが、粗雑でもなければ靈妙でもないのは、「対立を超えてそれ自体が存在の全てである」絶待に依拠しているからである。だから、『妙妙』と言ひるのである。粗雑でないことを『精』と言ひ、「あらゆる差別的な」相を超え離れていることを『遺』と言ひ。「眼・耳・鼻・舌・身・意の六根のうち、いずれか」一根が既に「その本源に」立ち返れば、六根は「全て執着の対象から」悉く脱れる。だ

から、「見聞覚知は、別個に」分離せず、唯一（無二）の宝覚（摩訶僧祇）を成就するのだ。以下、「觀世音菩薩が」現出させるものを列挙して言う（此れ徳本を叙ふるなり。問性の本真、麤に非ず妙に非ざるは、絶待に由るが故に。故に「妙妙」と云う。麤に非ざるを「精」と曰い、相を離るるを「遺」と曰う。一根既に返れば、六根（六根）咸く脱す。故に分隔せず、一宝覚を成す。下に現する所を列ねて云う／此叙徳本也。問性本真、非麤非妙、由絶待故。故云妙妙。非麤曰精、離相曰遺。一根既返、六根咸脱。故不分隔、成一宝覚。下列所現云）（卷六・T39906c）とする。『楞嚴經』卷四で、耳門による「一門深入」（T19-123a）を説いている所以である。

(5) 故我能現衆多妙容、能説無邊祕蜜神呪（摩訶僧祇） 〓 『義疏注経』は、「觀世音菩薩が現出させる妙なる容（たえ）についての」総括的な記述である。「觀世音菩薩の」妙なる容（たえ）は「状況に応じて」多種多様に現れるから、形や量でもって把握することはできない。祕密の神呪（じゆもん）は、限りな「く奥深」いから、言葉でもって説き尽くすことはできない。これは、つまり「心を静かに統一させて安定させる」三昧力でもって、本根に慈無量（じよんじゆん）（慈（じよんじゆん）による利他行）を熏じつけることよって、種々の形（すがた）を現出し、種々の呪（じゆもん）を説き、諸々の「衆生の」見聞（見聞）「覚知」に妙（たえ）「なる歓」樂を獲得させるのだ（標なり。妙容多く現すれば、形量を以て拘（と）う可からず。秘呪無辺なれば、言を以て説取す可からず。此れ則ち三昧力もて本に慈無量心を熏するに由り、種種の形を現じ、種種の呪を説き、諸もろの見聞をして其の妙楽を獲しむ／標也。妙容多現、不可以形量拘。秘呪無辺、不可以言説取。此則由三昧力熏本慈無量心、現種種形、説種種呪、令諸見聞獲其妙楽）」（卷六・T39906c）とする。「標」とは、最初に掲げられた総括的な記述のこと。『唯識仏教』に「ある経論の文句を検討する際に、先ず初めに記述すること」（p.288）とある。

(6) 燦迦羅（摩訶僧祇） 〓 「梵語チャクラの音写。堅固または不壊の義。また輪とも訳すが、それは輪に煩惱を破摧する意があるからである」（荒木訳・p.266）。『楞嚴經』卷三にも「燦迦囉心無動転」（T19-119b、荒木訳・p.262）という用例が見え、荒木氏は、「がっしりと壊れない」と訳す。

(7) 母陀羅 〓 「梵語ムドラーの音写。印相」のこと（荒木訳・p.182）。「仏や菩薩の内面的な悟りを示す形。これには有相と無相の区別があり、無相は手に結ばなくとも結んだのと等しいとされ、有相の印は、手の形と組み合わせのほか、杖・刀・蓮などの持物でも表現する」（中村「印相」条・p.68）。密教以前の主な印相には、施無畏印（右手を開いて掌を外に向けて肩の辺に上げる）・転法輪印（両手を胸の辺に上げて右手は掌を、左手は反対にして左右の一本ずつ指先を触れる）・蝕地印（坐像で右手を垂れて地に向ける。成道の時に用いたのに起源する）・禪定印（両手の五指を伸ばして左を下にして重ねる。瞑想に入る思惟の相）・施願印（右手を開いたまま垂れ、掌を外向きにする）がある（同上）。『楞嚴経』巻二にも「即時如来、垂金色臂、輪手下指、示阿難言、汝今見我母陀羅手。為正為倒」（T19.110c、荒木訳・p.97）という用例が見える。

(8) 清淨寶目 〓 可度『楞嚴経箋』に「『清淨の宝目』とは、法眼（真理を見る眼）が清淨であることを言う（『清淨の宝目』とは、法眼の清淨なるを言う／清淨宝目者、言法眼清淨）」（巻六・28880b）とあるのに拠って訳した。

(9) 其中或現一首三首 〓 得大自在 〓 『義疏注経』に、「首は諸々の聖たちをも（超）出しており、（それは、真理そのものたる）法身なのである。臂は〔解脱によつて衆生を諸々の苦しみから〕提接することができるから、〔仏が仮の姿を現した〕化身なのである。目は〔智慧によつて万事万物を〕明（らかに照らしたところ）に〔衆生を〕導くから、〔完全な智慧の現れたる〕智身なのである。〔觀世音菩薩は〕物を〔見る際に〕虚に見ることがないから、〔衆生を〕見たならば必ず利益をもたらず。だから、〔衆生を〕救い護ることができなのだ（首は衆生を出せば、法身なり。臂は能く提接すれば、化身なり。目は明に導くを以てすれば、智身なり。物に虚見無ければ、見れば必ず利益す。故に能く救護す／首出衆聖、法身也。臂能提接、化身也。目以導明、智身也。物無虚見、見必利益、故能救護）」（巻六・T36.907a）とあり、孤山智円は長水の注に更に注して、「首は法身の、〔凡聖の〕両辺を超出するを表し、臂は解脱の、衆苦を提拔するを表し、目は般若の、万境を照了するを表す。或いは慈、或いは威は、首に結現するな

り。或いは定、或いは慧は、臂・目に結ぶなり。人の首は只だ一のみなり、故に奇数に従いて以て増す。臂は乃ち二有り、故に耦数に従いて以て辨ず。人の眼は二、天は或いは三、故に奇耦を兼ねて以て明らかにす（首表法身超出兩辺、臂表解脫提拔衆苦、目表般若照了万境。或慈或威、結現首也。或定或慧、結臂目也。人首只一、故從奇數以增。臂乃有二、故從耦數以辨。人眼二、天或三、故兼奇耦以明）」〔楞嚴經解蒙鈔〕卷六・221-222a」と説いている。

- (10) 二者…皆名我爲施無畏者 〓 『義疏注經』は、「一切の事象は幻のごとく実体がないと観ずる」如幻〔三昧の〕力でもって、本根に平等なる悲を熏じつけているから、一身は量りしれない〔自在な〕身体を現し、量りしれない〔自在な〕身体は一身を現し、十方〔に存在する如何なる〕微細な国土にも残らず〔その姿が〕現れる。〔そうして、觀世音菩薩は〕一つ一つの呪を説き、諸々の苦悩を除き去るから、畏れ無き〔状態となった〕衆生は、〔何ものにも執われず障げられない〕大〔いなる〕自在さを手に入れるのだ（如幻力もて本に等悲を熏ずるに由るが故に、能く一身は無量の身を現じ、無量の身は一身を現じ、十方の微塵に、刹として現ぜざること無し。一一の呪を説き、衆もろの苦悩を抜すれば、無畏の衆生は、大自在を得／由如幻力熏本等悲故、能一身現無量身、無量身現一身、十方微塵、無刹不現。説一一呪、抜衆苦悩、無畏衆生、得大自在）」（卷六・T39307a）とする。なお、「故我妙能現一一形、誦一一呪」については、『正脈疏』に「『一一の形を現ず』とは、各おのの機に対して各おの身を現するなり。『一一の呪を誦す』とは、各おのの身に於いて各おのの呪を説くなり（現二形、対各機而各現身也。誦一一呪者、於各身而説各呪也）」（卷六・213-238c）とあり、衆生それぞれに対して、それぞれに合った呪を説くと解されているが、此經に説かれていたのは、具体的には「楞嚴呪」のみである。「施無畏者」については、(三)注(43)参照。
- (11) 三者…求我哀愍 〓 『義疏注經』は、「觀世音菩薩は、心を静かに統一させて安定させる」三昧力でもって本根に喜の心を熏じつけているから、遊行する先々の世界にいる衆生で〔その姿を〕目にする者たちは、皆な歡喜〔の心〕を生じ、〔その〕身や財を惜しむことなく〔喜捨し〕、哀愍を求めるのである（三昧力もて本に喜心を熏

ずるに由るが故に、能く遊ぶ所の世界の衆生にして見る者は、咸みな歡喜を生じ、身財を惜しまず、以て哀愍を求む／由三昧力熏本
喜心故、能所遊世界衆生見者、咸生歡喜、不惜身財、以求哀愍」(1739907a)とする。また、『法華經』「普門品」には「無
尽意菩薩は、仏に白まをして言う、『世尊、我れ今まさに觀世音菩薩を供養すべし』と。即ち頸くびの衆もろもろの宝珠の瓔
珞の価、百千兩の金こがねに直あたするを解きて、以て之を与え、是の言を作す。『仁者よ、此の法施の珍めづしき宝の瓔珞を
受けたまえ』と。時に觀世音菩薩は、肯うえて之を受けず。無尽意は、復た觀世音菩薩に白まをして言う、『仁者よ、
我等を愍あはれむが故に、此の瓔珞を受けたまえ』と。爾の時、仏は觀世音菩薩に告げたまう、『當に此の無尽意菩
薩及び四衆と天龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人・非人等を愍あはれむが故に、是の瓔
珞を受けたまえ』と。即時そのとき、觀世音菩薩は、諸もろの四衆及於および天・龍・人・非人等を愍あはれみて、其の瓔珞を受
け、分ちて二分と作し、一分は釈迦牟尼仏に奉り、一分は多宝仏の塔に奉り(無尽意菩薩、白仏言、世尊、我今
當供養觀世音菩薩。即解頸衆宝珠瓔珞、直百千兩金、而以与之、作是言。仁者、受此法施珍宝瓔珞。時觀世音菩薩、不肯受之。
無尽意、復白觀世音菩薩言、仁者、愍我等故、受此瓔珞。爾時、仏告觀世音菩薩、當愍此無尽意菩薩及四衆、天龍、夜叉、乾闥婆
阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人非人等故、受是瓔珞。即時觀世音菩薩、愍諸四衆、及於天、龍、人非人等、受其瓔珞、分
作二分、一分奉釈迦牟尼仏、一分奉多宝仏塔) (17957b、岩波文庫本① p.238)とあり、『解蒙鈔』は、「三者…求我哀愍」の
一段が「普門品」(の)の一段に対応するとみなしてゐる(卷六・221-223b)。

(12) 究竟「無上の。究極の」(「中村」p.263) という形容詞、「事理の至極。究極の境地。物事の極限」(最後の目的。
究竟法身。仏教の最終至高目的。相待(相對)を超えた境地)「さとり、成仏する位。天台宗で立てる六即の最
高位。究竟位の略」(華嚴宗で立てる究竟位) (同上) という名詞、「きわめ尽くす。悟りをきわめる」(徹底的に
体得する)「実現する。達成する」(同上) という動詞とがあるが、ここは「最高の境地」を表す名詞の意味であ
る。用例としては、『法華經』卷二「信解品」の「我等長夜、於仏智慧、無貪無著、無復志願、而自於法、謂是

究竟」(T9:186-c、岩波文庫本① p.256)など。なお、動詞の用例には、『楞嚴經』卷四の「今得聖乘、猶未究竟」(T19:219、荒木訳・p.305)などがある。

(13) 四者…得大涅槃。『義疏注經』は、「円〔滿に〕照〔し出す三昧の〕力でもって、本根に捨無誤者の心を熏じつけているから、既に果証とり、珍しい宝石でもって、上は諸々の仏に施し、下は衆生に〔その功德を〕及ぼすから、〔衆生が〕求めるところの〔世の中の事柄やそれを超えた仏の世界の事柄といった〕世法・出世法を、願いのままに成就させる(円照力もて本に捨心を熏ずるに由り、既にして果証し、珍宝を以て、上は諸仏に施し、下は衆生に及ぼすを得れば、亦た求むる所の世・出世の法をして、願に随したがわること無からしむ)由円照力熏本捨心、既而果証、得以珍宝、上施諸仏、下及衆生、亦令所求世出世法、無不隨願。此上喜捨二段、互言皆得」(卷六・T39:907a)とする。

(14) 圓照三昧。『義疏注經』は、「円照三昧」とは、即ち一行三昧なり(円照三昧者、即一行三昧也)」(卷六・T39:907b)とする。『解蒙鈔』(卷六・221:223d)は、この「一行三昧」を解釈するにあたり、『起信論疏』卷二に引用された『文殊般若經』を援用して次の様に述べている。

たとえば『文殊般若經(文殊師利所説摩訶般若波羅蜜經)』に言っている、「どうして一行三昧と名づけるのですか」と。仏は言った、『法界せかいは一相絶対平等であるから、〔法界に存在する事物を〕縁として法界せかいに専念するのを「一行三昧」と名づける。一行三昧〔の境地〕に入った者は、数えきれない諸々の仏や法界せかいに〔固定的・実体的な〕差別ちがひの相すがたが無いということを知悉するのだ(如えは『文殊般若經』に言う、「云何が一行三昧と名づく」と。仏言う、「法界は一相なれば、縁を法界せかいに繋つぐ、是れを『一行三昧』と名づく。一行三昧に入る者は、尽く恒沙の諸仏・法界に差別の相無きを知る」と)(T8:31a-b)と。如文殊般若經言、云何名一行三昧。仏言、法界一相、繋縁法界、是名一行三昧。入一行三昧者、尽知恒沙諸仏法界無差別相」(T44:5223b)

「一行三昧」は、『望月』に「法界の平等一相を觀する三昧を云う」(第一冊・p.130)とある。

(15) 縁心自在 〓 「縁心」とは「縁慮心」のこと（荒木訳・p.104）。「外界の対象を縁として思慮する心」（『中村』「縁慮心」条・p.121）。「楞嚴經」卷二にも「汝等尚以縁心聽法、此法亦縁、非得法性」（T19-11a、荒木訳・p.106）という用例が見え、荒木氏は、「分別心」と訳す。『集注』は、「補遺に云う」として「音声おとを識別する」耳識（聴覚）は最初に音声おとを（悟入の）縁とするから、『縁心』と言う。前塵（認識対象）に（心が引きずられて付き）従うことがないから、『自在』と言う（耳識は初め音声を縁するが故に、『縁心』と曰う。前塵まへじんに循したがわざるが故に、『自在』と曰う／耳識初縁音声故、曰縁心。不循前塵故、曰自在」（Z17-157a）とする。

(16) 因入流相、得三摩提 〓 「入流」の解釈については、(一)注(3)参照。ここでは、長水子璿の説（『義疏注経』卷六・T39-903a）に基づいて訳を試みたが、「流」の語を「法流」すなわち「真理の流れ」と解釈する温陵戒環の説（『要解』卷一・Z17-791a）に基づくなら、「真理の」流れに入るといふ相すがたによって」といった訳になる。『正脈疏』は、「入流の相に因りて、三摩提を得」について、「最初に聞かえに反り、円湛にして不生滅の性に住まるを、因地の心と為すなり（因入流相、得三摩地者、最初反聞、住円湛不生滅性、為因地心也）」（卷六・Z18-396）、すなわち、真正の聞に立ちかえり、円満にしてゆったりとした不生滅の本性に住まることを、修行を支える心（因地心）とするのだ、と解釈している。

(17) 彼佛如来 〓 『正脈疏』は、「彼の仏如来」とは、即ち観音如来なり（彼仏如来、即観音如来）」（卷六・Z18-391a）とする。(一)に「時に於いて仏有りて世に出現し、『観世音』と名づく（於時有仏出現於世、名観世音）」云々と記されている仏のこと。観世音菩薩に対し、聞・思・修の実践を手がかりとした三昧の境地への深入を教示したとされる。詳しくは(一)参照。

(18) 授記 〓 『中村』に「修行者が未来に最高の悟りを得るであろうことを仏が予言、約束すること。仏が弟子に、未来には仏に成れるであろうという保証を与えること」（p.67）とある。

(19) 世尊：徧十方界。『義疏注経』は、「眼〔の〕観〔るといふはたらき〕耳〔の〕聴〔くといふはたらき〕が言及されるのは」、「眼・耳・鼻・舌・身・意の」六根のうち二例を概略して取りあげたのである。もしこの聴聞を観じ、「耳根という」一根が〔その本源に〕立ちかえれば、「見・聞・嗅・味・触・知の」六〔つの分別作〕用は起こらない。だから、十方で円〔満にして霊〕明な唯一〔無二〕の宝覺〔を得た菩薩〕は、こうした理由で〔『観世音』という〕名を得ることになり、一切〔の世界〕に行きわたることになったのだ〔眼観耳聴、六根の二を略拳するなり。或いは此の聴聞を観じ、一根旋復すれば、六用成ぜず。故に十方に円明なる唯一の宝覺は、此れに由りて名を得て、亦た一切に遍し／眼観耳聴、略拳六根之二也。或觀此聴聞、一根旋復、六用不成。故十方円明唯一宝覺、由此得名、亦遍一切〕（卷六・139,907b）とする。

（本多道隆）